

# 比較言語学入門Ⅲ

日 野 資 成

## 0. はじめに

第一回の「比較言語学入門Ⅰ」では、まず比較言語学に貢献した代表的な人々を紹介して比較言語学の歴史をたどり、さらに比較言語学の方法論とそれにもとづく世界の諸言語の分類を示した。前回の「比較言語学入門Ⅱ」では、言語の歴史的変化をたどる歴史言語学について音韻・意味・語彙・文法の観点から論じた。今回は、現代の世界の言語を文法の観点から比較対照してみたい。

第1節では品詞の観点から世界の言語を比較する。まず、どの品詞が一般的であるかを検討する。名詞・動詞・形容詞などの主として内容を表す品詞はほぼすべての言語にあるが、助詞・接続詞・冠詞などの主として文法的機能を表す品詞はそうではない。さらに、名詞・動詞・形容詞の区別の仕方についても論じる。第2節では語順の比較を試みる。まず、SVO・SOV・VSOなどの文型の、世界の言語における割合を示す。さらに、その語順と、句内における語順の関係についても論じてみたい。第3節では格の比較をする。世界の言語には、主格・対格の区別をする言語だけでなく、能格・絶対格の区別をする言語、さらに非能格・非対格の区別をする言語も存在する。それぞれの言語を具体例にもとづいて論ずる。第4節では、態について、受動態を中心に論ずる。まず、規則的受動態（直接受動態）を紹介し、続いて特殊な受動態（ドイツ語の非人称受動態・英語の擬似受動態・日本語の間接受動態）を紹介する。中動態についても少し触れる。最後に第5節では冠詞と名詞、主語と述語などの呼応について、いくつかの言語を比較して論ずる。

## 1. 品詞 (grammatical category)

品詞とは、意味・機能・形式などの観点から語を分類した種別で、それぞれの語はいずれかの品詞に属することになる。さまざまな品詞は、新しい語がさらに追加される可能性の高い名詞・動詞・形容詞などの大きな品詞 (major category) と、その可能性が低い助詞・接続詞・冠詞などの小さな品詞 (minor category) に大きく分けることができる。日本語では、「メガバイト」(コンピュータの容量を表す単位) は名詞、「アクセスする」は動詞、「ユビキタス」(どこにでもある) は形容詞として最近追加された語であるが、助詞や接続詞には新たな語が追加されることはあまりない。

### 1.1 品詞の見分け方

ここでは、大きな品詞である名詞・動詞・形容詞の見分け方を紹介する。意味と機能の観点から3品詞を比べたのが次の表である (O'Grady 1996: 1-2)。

表1 3品詞の意味・機能

品詞	意味	機能	例
名詞	個々のもの・ことがら	指し示す	book, boy, tree
動詞	動作・過程・状態	述語となる	arrive, buy, give
形容詞	属性を示す	修飾する	tall, smart, cheap

このような意味と機能の違いにより、3つを区別することは可能であるが、もう一つ、この3つがそれぞれどのような語とともに起こるかを調べることによって区別することができる。次の表2は、英語において3品詞とともに起こる語を示している。

表2 英語において3品詞とともに起こる語

品詞	ともに起こる語	例
名詞	冠詞 (a, the) 指呼語 (this, that)	a book, this book
動詞	時制標識 (過去・現在・未来) アスペクト (完了・進行・反復など)	arrived have arrived, is going
形容詞	程度副詞 (very)	very fast

冠詞や指呼語（「この」・「その」など）とともに起こるのが名詞・過去時制や完了のAspectとともに起こるのが動詞・程度副詞「とても」とともに起こるのが形容詞というテストによって、この3つの品詞を持つことがわかる言語を次に挙げる。

表3 英語・ドイツ語・中国語における3つの品詞の例

言語	名詞	動詞	形容詞
英語	a book (本)	arrived (arrive の過去)	very tall (とても背が高い)
ドイツ語	die Sonne (太陽)	dankte (danken の過去)	sehr glücklich (とても幸運な)
中国語	那手 (その手)	結婚>結婚了(結婚した)	很好 (とてもよい)

ハワイ語では、冠詞とともに起こる ke Akua (定冠一神) の Akua (神) などは名詞であるとわかるが、一方動作を表す語・属性を表す語はどちらも、Aspect・程度副詞の両方とともに起こる (Elbert and Pukui 1979: 129)。

(1) a. Ua hele loa 'o ia  
完了 行く とても 主格 彼  
「彼は遠くに行ってしまった」

b. Ua komo loa 'o ia  
完了 入る とても 主格 彼  
「彼はとても入れ込んでいる」

(2) a. Ua ala loa 'o ia  
完了 目覚めて とても 主格 彼  
「彼はすっかり目が覚めている」

b. Ua mākaukau loa 'o ia  
完了 用意ができた とても 主格 彼  
「彼は準備万端だ」

(1) では、動作を表す hele (行く)・komo (入る) が、(2)では属性をあらわす ala (目覚めて)・mākaukau (用意ができた) がみな、完了のAspectを表す ua・程度を表す副詞 loa (とても) とともに起きている。これは、ハワイ語には動詞と形容詞の区別がないことを示している。つまり、ハワイ語には名詞・動詞 (形容詞も含める) の2種類の区別しかないといえる。

日本語では、ものを表す木・花・本などは、この木・この花・この本と言

えるので名詞である。動作を表す語は過去形になるが、程度を表す副詞「とても」とはともに起こらない。

- (3) a. きのうち東京へ行った  
b. \*きのうち東京へとても行った

一方、属性を表す語は、過去形にもなり、程度を表す副詞「とても」とともにも起こる。

- (4) きのうちはとても静かだった

この「静かだ」「おもしろい」など、伝統文法では形容動詞・形容詞といわれている語を、ここでは形動詞 (adjectival verb) と名づける。名詞を形容する機能と同時に、述語となる動詞の機能も備えているからである。英語の形容詞のように、過去形にならず、「とても」とともに起こる語は、日本語にない。つまり、日本語は次の3つの品詞に分けることができる。

- (5) ①名詞 「この」などとともに起こる  
②真の動詞 過去形になるが「とても」とともに起こらない  
③形動詞 過去形になり、「とても」とともに起こる

韓国語も日本語と同じで、i (この) とともに起こる i chayk (この本) の chayk (本) は名詞である。しかし、動作を表す語は過去形になるが、程度を表す副詞「とても」とはともに起こらない (Sohn 1994: 98)。

- (6) a. ecey ka -ss -ta  
きのうち 行く-過去-叙述  
「(彼は) きのうち行った」  
b. chayk-ul ilk -ess -ta  
本 -を 読む-過去-叙述  
「(彼は) 本を読んだ」  
(7) a. \*ecay nemwu ka -ss -ta  
きのうち とても 行く-過去-叙述  
「きのうちとても行った」  
b. \*chayk-ul acwu ilk -ess -ta  
本 -を とても 読む-過去-叙述  
「本をととても読んだ」

一方、属性を表す語は、過去形にもなり、程度を表す副詞「とても」とともにも起こる。

- (8) a. nemwu noph-ass -ta  
 とても 高い-過去-叙述  
 「とても高かった」  
 b. acwu kil -ess -ta  
 とても 長い-過去-叙述  
 「とても長かった」

これらの noph-ta (高い), kil-ta (長い) も形動詞といえる。一方過去形にならず、「とても」とともに起こる語も韓国語にない。つまり、韓国語も次の3つの品詞に分けることができる。

- (9) ①名詞 i (この) などとともに起こる  
 ②真の動詞 過去形になるが nemwu・acwu (とても) とともに起こらない  
 ③形動詞 過去形になり, nemwu・acwu (とても) とともに起こる

## 2. 語順 (word order)

### 2.1 文における語順

世界の言語は、主語 (Subject), 動詞 (Verb), 目的語 (Object) の3つの文要素の順番によって分けることができる。まずは、文における S・V・O の順番という観点から世界の言語を比較してみよう。文を形作る語順と、その語順に属する言語を次に挙げる。

表4 世界の言語の語順(VOS・OSV・OVS言語は、角田(1992)による)

語順	言語
SVO	英語 スペイン語 フランス語 中国語
SOV	日本語 韓国語 ヒンディ語 ロシア語
VSO	ハワイ語 ウェールズ語
VOS	タガログ語・サモア語 (VSO もある)
OSV	カバルディアン語 (SOV もある)
OVS	アパライ語

表4で挙げたように世界の言語は6つの語順のどれかに属するが、実際にははじめの3つ(SVO・SOV・VSO)の型を持つ言語が世界の95パーセント以上を占めている(Croft 1990: 46)。この3つの型に共通しているのは、主語(S)が目的語(O)よりも先にくることである。

## 2.2 文における語順と他の語順の相関関係

文における語順は、その他の語順(助詞と名詞・動詞と前置詞句・所有者と名詞・接続詞と節)と密接に関係している。英語と日本語を例に述べる。

表4にもあるとおり、日本語はSOV、英語はSVOの語順である。ここで、Vを基準にしてVがOを支配すると考えると、日本語はVからOに左に分かれ、英語はVからOに右に分かれる。

### (10) 日本語と英語の語順の対比(VとO)

	日本語	英語
VとOの語順	SOV ( <u>ごはんを</u> <u>食べる</u> )	SVO ( <u>eat</u> <u>rice</u> )
	O      V	V      O

同様に、助詞(P)と名詞(N)・Vと副詞・名詞と所有者・接続詞と節の語順は次のようになる。

### (11) 日本語と英語の語順の対比(その他)

	日本語	英語
PとN	N—P ( <u>公園</u> <u>で</u> )	P—N ( <u>at</u> <u>the park</u> )
	N    P	P    N
Vと副詞	副詞—V ( <u>日曜日に</u> <u>着いた</u> )	V—副詞 ( <u>arrived</u> <u>on Sunday</u> )
	副詞    V	V      副詞
Nと所有者	所有者—N ( <u>学生の</u> <u>本</u> )	所有者—N ( <u>the student's</u> <u>book</u> )
	所有者    N	所有者    N
		N—Possessor ( <u>a book</u> <u>of the student's</u> )
		N      所有者
接続詞とS (文)	S—接続詞	接続詞—S
	<u>マリーが出た</u> <u>から</u> ,	<u>Because</u> <u>Mary left</u> ,
	節      接続詞	接続詞      節

太字で示した P・V・N・接続詞を基準にすると、日本語はすべて左に分かれている。一方英語では、所有者が N の左に分かれる例外 (students' book) を除くと、すべて右に分かれている。このことから、日本語は左分かれ (left-branching)、英語は右分かれ (right-branching) の言語であるといえる。

### 3. 格 (case)

格とは、文における名詞句の述語に対する文法関係を示す機能を持つ屈折の体系である。世界の言語には、自動詞・他動詞の主語を示す主格 (nominative) と、他動詞の目的語を示す対格 (accusative) の区別を持つ主格・対格言語と、他動詞の主語を示す能格 (ergative) と、自動詞の主語・他動詞の目的語を示す絶対格 (absolutive) の区別を持つ能格・絶対格言語、さらに非能格 (unergative) と非対格 (unaccusative) の区別を示す非能格・非対格言語がある。まず、主格・対格言語から見ていく。

#### 3.1 主格・対格言語 (nominative-accusative languages)

主格・対格言語における主格・対格は、主として接辞によって表される。韓国語・日本語・トルコ語の例を挙げる。

(12) a. John -i ttena-ss -ta. (自動詞の例)

ジョン-主格 去る -過去-叙述

「ジョンは去った」

b. John -i Mary -lul mil -ess -ta. (他動詞の例)

ジョン-主格 マリー-対格 押す-過去-断定

「ジョンはマリーを押した」

(13) a. 太郎が東京に行った。(自動詞の例)

b. 太郎がご飯を食べた。(他動詞の例)

(14) a. Hasan öküz-ü al -dı.

ハサン 牡牛-対格 買う-過去：3単

「ハサンは牡牛を買った」

3つの言語における格表示を次にまとめる。

表5 接辞による主格・対格表示

言語	主格	対格
韓国語	-i	-lul
日本語	-が	-を
トルコ語	∅	-ü

トルコ語では、主格はゼロ表示、対格は-üで表される。逆に、主格が何らかの形で明示され、対格がゼロ表示である言語はない (Croft 1990: 104)。格が接辞でなく冠詞によって表される言語もある。

(15) Der Mann sieht den Hund.

冠詞 (主格) 男の人 見る 冠詞 (対格) 犬

「男の人は犬を見る」

このように、ドイツ語では、主格は der, 対格は den を名詞につけることによって表されている。

### 3.2 能格・絶対格言語 (ergative-absolutive languages)

この格表示を持つ言語は比較的少ない。たとえば、トンガ語やイヌクティトゥ語、バスク語がそうである。

(16) トンガ語

a. Na'e ma'u 'e Tevita 'a e me'a'ofa.

過去 受ける 能格 デビット 絶対 冠詞 贈り物

「デビットは贈り物を受け取った」

b. Na'e alu 'a Tevita ki Fisi.

過去 行く 絶対 デビット へ フィジー

「デビットはフィジーへ行った」

(Andersen 1976: 3-4)

(17) イヌクティトゥ語

a. Palluk-up innuk takuvaa.

パルク-能格 人 (絶対) 見た

「パルクは人を見た」



b. Innuk sinippuq.

人 (絶対) 眠る

「人が眠っている」

(Givón 1984: 152)

(18) バスク語

a. Ni -k gizona ikusi d -u -t.

彼 能格 男の人 見る 3単-助動-3単

「彼は男の人を見た」

b. Gizona etorri d -a.

男の人 来る 3単-助動

「男の人が来た」

(Palmer 1994: 27)

3つの言語における格表示を次にまとめる。

表6 接辞による能格・絶対格表示

言語	能格	絶対格
トンガ語	'e	'a
イヌクティトゥ語	-up	∅
バスク語	-k	∅

イヌクティトゥ語、バスク語では、絶対格はゼロ表示であるのに対し、能格は明示されている。逆に、絶対格が明示され能格がゼロ表示である言語はない (Croft 1990: 105)。

### 3.3 非能格・非対格言語 (unergative-unaccusative languages)

他動詞主語と自動詞の動作主主語に対して、自動詞の被動作主語と他動詞の目的語を区別する言語もある。たとえばラズ語 (Laz) では、他動詞主語と自動詞の動作主性主語は -k で、自動詞の被動作主語と他動詞の目的語はゼロで示される。

(19) 他動詞の主語, 他動詞の目的語

koči-k doqvilu v'ji-∅

男 -能格 彼: 殺す: それ 豚-絶対

「その男はその豚を殺した」

(20) 自動詞の動作主主語

jovo-epe-k -ti lales

犬 -複 -能格 -も それら：吠える

「犬たちも吠えた」

(21) 自動詞の被動作主語

koči-∅ dovrur

男 -絶対 彼：死んだ

「その男は死んだ」

3.1の主格・対格言語, 3.2の能格・絶対格言語, 3.3の非能格・非対格言語の格表示の区別を次にまとめる。

表7 3つのシステムの格表示区別

	主格・対格言語	能格・絶対格	非能格・非対格
他動詞			
主語	X	X	X
目的語	Y	Y	Y
自動詞			
動作主主語	X	Y	X
被動作主語	X	Y	Y

非能格と非対格を区別する言語を能動 (active) 言語, または動作主格表示 (agentive case marking) 言語という。

### 3.4 その他の格

主格・対格以外の主要な格として, 与格 (dative), 属格 (genitive) がある。与格の主な機能は間接目的語を示すことである。

(22) ジョンがマリーに本をあげた。

間接目的語は, 「本」の受け手となる。与格は, 「あげる」「送る」「差し出す」など, もののやり取りを表す動詞とともに使われる。

(23) 太郎が花子に手紙を送った。

(24) 太郎が花子に贈り物を差し出した。

韓国語では, 日本語の与格が現れるところに対格が現れる。

- (25) Mary -ka haksayng-tul-ul yenge-lul kalchy-ess -ta  
 マリー-主格 学生 -複-対格 英語-対格 教える-過去-叙述  
 「マリーは学生たちに英語を教えた」

これを二重対格構文という。

英語の人称代名詞には与格と対格の区別がなく、たとえば1人称単数はI (主格)・my (属格)・me (対格)と屈折する。一方ドイツ語の人称代名詞には、与格と対格の区別があり、1人称単数はIch・meiner・mir・michと屈折する。geben (与える), helfen (助ける)などの動詞はその目的語として与格を取る。

- (26) Geben Sie mir das Buch.  
 与える 2単:主語 1単:与格 定冠:中:単:対格 本  
 「私に本を取ってください」

- (27) Ich helfe dir, wenn mir hilfst.  
 1単:主語 助ける:1単 2単:与格 もし 1単:与格 助ける:2単  
 「もしおまえが手伝ってくれるなら、私もおまえの手伝いをしよう」

属格は二つの名詞をつなぐ機能を果たす。日本語では助詞「の」が属格の機能を果たしている。

- (28) ぼくの本

韓国語では-uyが属格の機能を果たす。

- (29) Mary -uy cip  
 マリー-属格 家  
 「マリーの家」

英語では、次のようにアポストロフィーとsで表される。

- (30) Mary 's book  
 マリー-属格 本  
 「マリーの本」

ofを使って表すこともできる。

- (31) a book of Mary  
 冠詞 本 属格 マリー  
 「マリーの本」

その他、世界の言語には次のような場所を表すさまざまな格がある (Blake 1994: 155)。

表 8 場所を表す格 (Local Case)

格	意味
方向格 (allative)	(～の方向) へ
入格 (illative)	(～の) 中へ
奪格 (ablative)	～から
離格 (elative)	(～から) 外へ
上格 (superessive)	(～の) 上に
下格 (subessive)	(～の) 下に
移格 (translative)	(～を) とおって

### 3.4 格の互換性

ある格を専門とする格助詞が他の格をも示す場合がある。たとえば日本語では属格の「の」が主格を表すこともできる。

(32) 太郎の描いた絵

(32) の「の」は「が」に置き換えることができ、主格を表す。ただし、この「の」は依存節にしか現れず、主節には現れない。

(33) \*太郎の描いた。

主節の主格には、もちろん「が」が使われる。

(34) 太郎が描いた。

主格の「が」が対格を示すこともある。

(35) 水が飲みたい。

(35) の「が」は「を」に置き換えることができ、対格を表す。

## 4. 態 (voice)

態とは、主題役割 (thematic roles) と文法関係 (主語・目的語など) の対応を記述する文法範疇である。主題役割とは、参与者 (participants, 名詞句で表される) の動作・状態 (動詞で表される) との意味関係を表す。主題役割には、動作主 (agent), 被動作主 (theme), 目的地 (goal), 源

(source), 場所 (location) などがある。

動作主と主語とが結びつく能動態 (active) が最も一般的な態である。

#### 4.1 能動態 (active voice)

日本語と英語の例を挙げる。

(36) 太郎が 花子をぶった

動作主 被動作主

主語 目的語

(37) John hit Mary

動作主 被動作主

主語 目的語

「ジョンはマリーをぶった」

#### 4.2 受動態 (passive voice)

はじめに規則的受動態を、次に不規則受動態を論ずる。

##### 4.2.1 規則的受動態 (basic passives)

受動態化 (passivization) は、主題役割と文法関係の対応を換える操作で、主語が斜語 (oblique) に格下げされ、目的語が主語に格上げされる。この操作によってできた文を受動態 (passive) という。

(36), (37)に対応する日英の受動態を示す。

(38) 花子が 太郎にぶたれた

被動作主 動作主

主語 斜語

(39) Mary was hit by John

被動作主 動作主

主語 斜語

日本語の受動態は「られる」という語を動詞に接辞としてつけてできるので、形態的方法 (morphological strategy) による。一方、英語の受動態は助動詞 (be 動詞や become など) と動詞の変化形で構成されるので、迂言的方法 (periphrastic strategy) による。

日本語以外に韓国語も、動詞に*i*という接辞をつける形態的方法によって受動態が作られる。

- (40) Sensayng-nim-i      haksayng-eyuhayse    po -i -ess -ta.  
先生    -尊敬-主格 学生    -によって 見る-受動-過去-叙述  
「先生は学生に見られた」

英語以外にドイツ語も、werden (なる)という助動詞と動詞の過去分詞形による迂言的方法によって受動態が作られる (Keenan 1985: 257)。

- (41) Hans      wurde      von      seinem Vater    bestraft.  
ハンス なる：過去 によって 彼の 父 罰する：過分  
「ハンスは父によって罰せられた」

#### 4.2.2 不規則受動態 (non-basic passives)

不規則受動態には、非人称受動態、擬似受動態、間接受動態がある。

##### 4.2.2.1 非人称受動態 (impersonal passives)

主語が非人称代名詞である受動態を非人称受動態という。動詞の過去分詞とともに作られ、ドイツ語やオランダ語にその例がある。

- (42) Es      wurde      gestern    getanzt.  
非人代 なる：過去 きのう 踊る：過分  
「きのう踊りがあった」 (Keenan 1985: 274)

- (43) Er      wordt      hier      veel      geskied.  
非人代 なる：過去 ここで 多くの スキーする：過分  
「ここでスキーが多く行われる」 (Permuter and Postal 1984)

- (44) Er    wordt    gebeden.  
非人代 なる：過去 祈る：過分  
「祈りが行われた」 (Permuter and Postal 1984)

この受動態は自動詞とともに作られるが、自動詞は動作主主語とともに用いられる非能格動詞 (unergatives) であり、非動作主主語とともに用いられる非対格動詞 (unaccusatives) とともにには作ることができない。

- (45) \*Er    werd      (door    het water) binnen een    kwartier verdampt.  
非人代 である：過去 によって 冠詞 水 と 冠詞 15分 蒸発する：過分  
「15分で水が蒸発した」

- (46) \*Er werd (door het concert) een hele tijd geduurd.  
 非人代 である:過去 によって 冠詞 コンサート 冠詞 長い 時間 続く:過分  
 「コンサートが長く続けられた」

#### 4.2.2.2 擬似受動態 (pseudo-passives)

主語が、能動態の前置詞目的語と対応する受動態を擬似受動態 (pseudo-passives) という。英語にその例がある。

- (47) a. Several people have already talked about that. (能動態)  
 「数人の人々がそれについてすでに話した」  
 b. That has already been talked about by several people. (受動態)  
 「それが、数人の人々によってすでに話された」
- (48) a. A trained mechanic should look at this engine. (能動態)  
 「熟練の技師がこのエンジンを見るべきだ」  
 b. This engine should be looked at by a trained mechanic. (受動態)  
 「このエンジンは熟練の技師によって見られるべきだ」

(O'Grady 1996: 82)

#### 4.2.2.3 間接受動態 (indirect passives)

これは日本語に特有の受動態で、主語が経験主 (experiencer) となり、何らかの迷惑をこうむるという意味合いがあることから迷惑受動態 (adversity passives) ともいう。

(49) 母親が子供に泣かれた。

(50) 太郎が雨に降られた。

(51) 太郎が親に死なれた。

これらの受動態には、対応する能動態がない。

(52) \*子供が母親を泣いた。

(53) \*雨が太郎を降った。

(54) \*親が太郎を死んだ。

一方、(38)のように、対応する能動態(36)がある受動態を直接受動態 (直接受身) という。

(38) 花子が太郎にぶたれた。(受動態)

(36) 太郎が花子をぶった。(能動態)

### 4.3 中動態 (middle voice)

受動態の場合、他の動作主の行為が主体に及ぶが、中動態の場合、動作主の表す行為が動作主自身に及ぶ。古い印欧語のサンスクリット語やギリシャ語にこの態が見られ、たとえばギリシャ語の *λούομαι* は能動態の *λούω* 「私は洗う」の中動形で、能動態とは人称語尾が異なり、「私は私の体を洗う」の意味となる。新しい印欧語では、この中動態は失われ、その機能は再帰代名詞を伴う再帰動詞によって示される。たとえばドイツ語で「体を洗う」は *sich waschen*、英語では *wash oneself* である。

歴史的には中動態から受動態に発展したと思われる。中動態では動作主の行為が主体である動作主自身に及ぶのに対し、受動態では他の動作主の行為が主体に及ぶ、つまり主体に対する行為の主が自分自身から他人に広がったと考えられるからである（『言語学大辞典 術語編』 pp.926-7より）。

## 5. 呼応 (agreement)

呼応とは、「名詞が本来持っている特徴（人称、数、性、格）を他の文法範疇 [動詞、形容詞、限定詞 (determiner)] に記録するための屈折体系」である。そのうち形容詞、限定詞のみにかかわる呼応を特に照応 (concord) と呼ぶ。スペイン語の例を挙げる。

### (55) スペイン語の照応

	単数		複数
男性	el	hombre rico	los hombres ricos
	定冠(男:単)	男の人 金持ちの(男:単)	定冠(男:複) 男の人たち 金持ちの(男:複)
女性	la	mujer rica	las mujeres ricas
	定冠(男:単)	女の人 金持ちの(女:単)	定冠(女:複) 女の人たち 金持ちの(女:複)

(O'Grady 1996: 62)

これは、名詞の性と数を形容詞、限定詞（ここでは定冠詞）に記録する照応の例である。次は、3人称単数名詞が動詞に記録される英語の例である。

### (56) She works hard.

「彼女は一生懸命働く」



主語と目的語では、主語の方が動詞と呼応する場合が多い。たとえば(57)のように主語に3人称単数 the stranger が現れるときは動詞に-sがつくが、(58)のように目的語に3人称の the stranger が来ても動詞に-sがつかない。

(57) The stranger likes vegetables.

(58) \*They likes the stranger.

日本語でも、(59)のように主語に「学生」が現れる場合動詞は常態であるが、(60)のように主語に「先生」が現れる場合、動詞は尊敬動詞に変わる。

(59) 学生が来た。

(60) 先生がいらっしゃった。

一方、「先生」が目的語に現れても、動詞は尊敬動詞にはならない。

(61) \*学生が先生を御覧になった。

動詞が主語だけでなく目的語にも呼応する言語としてスワヒリ語がある。

(62) Juma a -li -wa-piga watoto

ジュマ 3単-過去-3複-ぶつ 子供たち

「ジュマは子供たちをぶった」

(62)で a は主語に、-wa は目的語に呼応している。

主語に加えて二つの目的語とも呼応する言語としてキンヤワンダ語 (Kinyarwanda) がある。

(63) Yohaani y -a -yi -mw -ohere -er -eje.

ジョン 彼は-過去-それを-彼女に-送る -益格-相

「ジョンはそれを彼女に送った」 (Baker 1988: 265)

このことから、主語と目的語の呼応の順位付けは次のように主語の方が高いことになる。

(64) 主語と目的語の呼応の順位付け

主語 > 目的語

これは、ある言語において目的語と動詞が呼応するならば主語と動詞も呼応するが、主語と動詞が呼応しても目的語と動詞が呼応するとは限らないことを示す。

## 6. まとめ

今回は、現代の世界の言語をさまざまな文法の観点から比較対照してみた。言語類型学的にも系統的にも異なる言語において共通の現象が見られる一方、言語に特有の現象も見られた。次に、共通の現象と言語に特有の現象をまとめる。

### 6.1 世界の言語に共通の現象

各節より一つずつ共通の現象を挙げる。

- (65) ①品詞では、少なくとも名詞と動詞の二つの区別がある。  
②語順では、世界の95%以上の言語で主語が目的語の前に現れる。  
③格の区別に二分法がある。  
④能動態と受動態がある。  
⑤主語の方が目的語よりも動詞呼応の順位付けが高い。

一方、それぞれの文法事項について、ある言語に特有の現象も見られた。

### 6.2 ある言語に特有の現象

これも各節より一つずつ特有の現象を挙げる。

- (66) ①韓国語と日本語には、名詞を修飾し述語となるという点で、形容詞と動詞の両方の機能を持つ形動詞という品詞がある。  
②カバルディアン語、アパライ語などごくわずかな言語では目的語が主語より前に現れる。  
③数少ない能動言語がある。  
④不規則受動態がある（ドイツ語・オランダ語の非人称受動態、英語の擬似受動態、日本語の間接受動態）  
⑤キンヤワンダ語では、二つの目的語が動詞と呼応する。

### 6.3 今後に向けて

以上、さまざまな文法現象について世界の言語を比較対照してみた。ある少数の言語に特有の文法現象がある一方、世界の言語に共通の文法現象も見

つかった。これは言語普遍性のある程度裏付けるものである。今後は、今回取り上げた言語以外の言語を比較対照することによって、さらに言語普遍性を追求していきたいと思っている。

### 省略記号

過分：過去分詞

助動：助動詞

絶対：絶対格

定冠：定冠詞

非人代：非人称代名詞

単：単数

複：複数

1：1人称

2：2人称

3：3人称

男：男性

女：女性

中：中性

## 参考文献

- 角田太作『世界の言語と日本語』1992年 くろしお出版
- 『言語学大辞典第6巻 術語編』1996年 三省堂
- Andersen, Stephan. 1976. On the notion of subject in ergative languages. In C. Li (ed).  
Subject and topic. New York: Academic Press. Pp.1-23.
- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*.  
Chicago: University of Chicago Press.
- Blake, Barry. 1994. *Case*. New York: Cambridge University Press.
- Croft, William. 1990. *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University  
Press.
- Elbert, Samuel and Mary Kawena Pukui. 1979. *Hawaiian grammar*. University of  
Hawaii Press. Givón, Talmy. 1984. *Syntax: A functional-typological perspective*.  
Volume 1. Philadelphia: John Benjamins.
- Keenan, Edward. 1985. Passive in the world's languages. In T. Shopen (ed.), *Language  
typology and syntactic description*. Vol.1: Clause structure. New York: Cambridge  
University Press. Pp.243-81.
- O'Grady, William. 1996. *Syntax file*. A textbook used in the course 'Introduction to  
Grammatical Analysis' at the University of Hawaii at Manoa.
- Palmer, Frank. 1994. *Grammatical roles and relations*. New York: Cambridge Univer-  
sity Press.
- Permutter, David and Paul Postal. 1984. The 1-Advancement Exclusiveness Law. In  
D. Permutter and C. Rosen (eds.), *Studies in Relational Grammar 2*. Chicago:  
University of Chicago Press. Pp.81-125.
- Sohn, Ho-Min. 1994. *Korean*. New York: Routledge.